

中尾達郎著

すい・つう・いき

—江戸の美意識攷—



中尾達郎著

すい・つう・いき

—江戸の美意識攷—

なかお たつろう
中尾 達郎

慶応義塾高等学校教諭，慶応義塾大学講師。
大正十一年，東京生まれ。慶応義塾大学文学
部卒。折口信夫，池田弥三郎に師事。著書に
『江戸の旅』『くらしの条件』などがある。

すい・つう・いき——江戸の美意識攷

昭和59年4月21日 第1刷発行
昭和60年2月11日 第2刷発行

定価 1600円

◎著 者 中尾達郎
発行者 吉田栄治

発行所 株式会社 三弥井書店

〒108 東京都港区三田3-2-6
(03) 451-9540 振替東京 9-21125

第二整版印刷・田島製本 ISBN 4-8382-9007-1 ©0095 Y1600E

目次

江戸の町・江戸っ子	5
粹	27
粹の語源	(27)
粹とその実態	(37)
かぶき・六法	63
粹から通へ	85
粹の東漸	(85)
洒落本と通り者	(94)
通の語源	(112)
通の在り方	(128)

いき	145
いきの語源	(145)
いきの萌芽と展開	(165)
いきとその現実	(177)
野暮	201
あとがき	223

凡例

○文語の引用文については、用字、送りがな、句読点などは現代式に、かなづかいは旧かなづかいに統一した。ただし、特殊なもの、例えば、粹を表す「帥」「すい」などはあえてそのままにしたものもある。また、促音、拗音は捨てがなにした。

○口語の引用文は新かなづかいに統一した。

○引用文中の傍線は筆者が施した。

○文語の引用文中の「」内には筆者の注、あるいは現代語訳を入れた。

○引用文中の読みにくい字には、原文以外に筆者の付したふりがなもある。

江戸の町・江戸っ子

箱根からこっちに野暮と化物はない

という諺がある。これはいわゆる江戸っ子の、よそ者に対しての手前味噌である。言い換えれば、江戸っ子が、通、いきといった美的概念は、江戸っ子だけが享有でき、よそ者の関わりえないものとして誇示していたことを示している。

そこで、こうした能天気な江戸っ子とはいかなるものか、またなにゆえにこうした太平楽な態度が出てきたのか考えてみる必要がある。

まず、江戸っ子という語を考察してみよう。

俗に三代続かねば江戸っ子ではない、などと言われている。これは、ある人の、その両親はもとより、その父の両親・母の両親がみな江戸根生^{ねせい}いの者でなければならないわけで、江戸時代の江戸の町ではかなり困難なことだったであろう。

天正十八年（一五九〇）八月一日、家康が江戸打入りを行ったが、そのころの江戸は武蔵野の一角の一小都市に過ぎなかった。家康は入城を機に、町造りを行う一方、家康の支配下にあった駿河、遠江、三河などの各地方の武士や庶民とともに近江、伊勢などの商人、鎌倉や小田原などの商人まで呼び寄せたりした。そのほか江戸近郷の者、京、大阪の商人なども江戸へ入り込んできた。

江戸は諸国の掃溜め

という諺が示しているように、江戸はさながら植民地のように全国から人が入り込んで形成されていた町である。江戸以外の人で、「江戸へ行けば食べられる」「江戸へ出て一旗揚げよう」という考えのもとに江戸へ出て来た者は江戸全期にわたっている。八代將軍吉宗治世の享保（一七一六―三五）ごろ初めて人口調査が行われたが、町方は五十万余、武家・神官・僧侶の人口を加えるとうに百万を超える世界一の大都会になっていたようである。町方五十万余の内、男三十二、三万、女十七万で比率はほぼ二対一であった。武家・寺社の人口では、女の数に極端に少ないから、江戸という町は、女の極めて少ない町ということが出来る。

話を元へ戻して、こうした状況のもとで、江戸生え抜きの者どうしの婚姻が二代にわたることなどがざらにあったとはとても考えられない。江戸の町の象徴ともいえる徳川十五代の將軍の中でさえ、該当するものは一人もいない、という事実がこれをもの語っている。

少なくとも、いきを論ずる場合には、この三代続きの、という見方は埒外に置き、江戸で生ま

れ、江戸で育ったものと見てよいであろう。

江戸の町は大別して山の手と下町になるが、この場合の江戸っ子は、下町に生まれ下町に育った者、それも主として職人階級に属する者と規定してよいと思う。

ところで、江戸という語は、下町という語とともに、時代により、見解の基準によって、その示す範囲に広狭がある。概して時の流れとともに、両者ともその範囲が広がってゆく傾きがある。

一般に江戸四里四方という。日本橋を起点として五街道の最初の宿駅、即ち、東海道の品川、甲州街道の内藤新宿、中山道の板橋、奥州街道・日光街道の千住までが総て二里の所にあるという。すると、江戸は、日本橋から五街道の第一の宿駅までということになり、その範囲はかなり広い。

『中央区史』には「往時、神田堀を境界とし、以南を江戸とし、以北を神田とした」とある。

本郷も兼康までは江戸の内

という名高い川柳がある。兼康というのは歯磨口中薬の元祖で、兼康祐元という歯磨薬の香具師が芝の芝居町（後に柴井町）に、いわゆる口上商人として大道見世を開き、繁昌するに従って、遂に居着きとなって店を開き、本郷にも出店を出した。芝の本店のそば（日吉町と芝口一丁目の間）には涙橋（後に難波橋）、出店の近く（本郷四丁目）には別れの橋があり、兼康の両店のそばに南北の追放場所があった。「本郷も」の「も」は「芝口も」に対していっているのである（『川柳江戸

砂子』による)。すると北は神田堀(龍閑川)、南は新橋川(汐留川)で限られた地を江戸と見る考え方が成り立つ。この見方によると、江戸はかなり狭い範囲になる。

これとは別に、池田彌三郎は、『東京の12章』で、「金杉橋の下を流れる古川(渋谷川)から、柳橋の下を流れる神田川までの間が、古い江戸で、この二つの川の川口の間の前面の水が、いわゆる江戸前であるという。」と言っている。

明和七年(一七七〇)刊の『遊子方言』には、吉原の茶屋の女房が、亭主はどこへ行ったかと客に尋ねられ、「今日は江戸へ参りました」と答えている(ただし、吉原などの廓の者は、廓外の町家をさして、一般に江戸と言っていたようである)。「江戸・町づくし稿」(上巻)によると、宝暦七年(一七五七)ごろまでは、浅草近くの者が、神田、日本橋辺へ出るのを「江戸へ行く」などと言い、白山、牛込の者が神田、日本橋辺へ出るのを「下町へ行く」などと言った。しかし、文化十年(一八一三)ごろには、江戸へ行く、下町へ行くとは全く言わなくなったという。吉原は今でこそ台東区千束四丁目で、疑うべくもなく下町と考えられているが、江戸時代にはいわゆる浅草田圃、吉原田圃などといわれていた所であるから、江戸へ行くと言うのは当然であろうが、浅草さえも神田、日本橋から見ると江戸ではないという意識があったのであろう。だいたい浅草は、江戸の町とは別個に、浅草観音の門前町として古くから栄えていたのが、奥州街道、日光街道の整備および、江戸の拡張に伴って江戸に吸収される形となったものと思われる。それが文化期(一八〇四)

一七)になると、完全に浅草も江戸だという意識を持たれるようになったのであろう。

こう見てくると、江戸という語の示す範囲は、江戸期全体を通じて揺れている。

寛保二年(一七四二)に編纂された『御定書百箇条』(『公事方御定書』くじかたおきだめがき下巻)の『百三、御仕置おしおき仕形いかたの事』の「江戸十里四方追放」の項には「延享元年(一七四四)極め」として「日本橋より四方へ五里づつ」とある。大体、今の鶴見、吉祥寺、蕨、草加、船橋を線で結んだ範囲である。この場合の江戸は追放刑のための江戸で、文字どおり江戸府内をさしているとは到底思えない。また「江戸払ひ」の項には「寛延元年(一七四八)極め」として、「品川、板橋、千住、本所、深川、四谷大木戸より内御構へ」とあるが、文面がちょっと曖昧である。ところが、『御触書宝暦集成』によるとはつきりする。

『御触書宝暦集成』(三十)の延享五辰年(一七四八。延享五年は七月十二日をもって寛延元年に改元されている)二月の条には「三奉行へ」の見出しで、「江戸払ひ御仕置の儀、只今までは、本所、深川に罷りあり候ふ儀は相構ひ申さず候へども、向後きやうこう、江戸払ひ御仕置相当の者は、江戸ならびに本所、深川町奉行支配限り、構への地に申し付くべきこと」(原文は候文。便宜上書下し文に改め、送りがなを付した)とある。この条文によると、従来、江戸払ひになったものは、本所、深川にいても差し支えなかったが、以後は本所、深川にすることを禁ずる、というので、本所、深川

も江戸の内のようである。が、「江戸ならびに本所、深川」とあるから、やはり、本所、深川は江戸の内には入れていないのであろう。

江戸府内の境界が明確でないため、各方面からしばしば幕府に対して質疑があったためか、文政元年（一八一八）に幕府は地図に朱線を施して、その境界を示した。「朱引^{しゅびき}絵^え図^ず」である。『徳川禁令考』（前集第五）の巻四十七「法制禁令之部」の「御府内と唱へ候ふ場所の事」の条に、「別紙絵図面朱引内を御府内と相心得云々」とあり、曲輪内から四里までの所、すなわち、東は常盤橋御門から砂村、亀戸、木下川、須田村、西は半蔵門から代々木村、角筈村、戸塚村、上落合村、南は外桜田御門から上大崎村、南品川、北は神田橋御門から千住、尾久村、滝野川村、板橋限りだとある。

「江戸十里四方追放」「江戸払ひ」「朱引き内^{うち}」などという法制上の江戸は、一般に考えられている江戸よりはるかに広かったにちがいない。これは処罰のために、強いて江戸の範囲を広げているのであろう。このことはそれなりに了解できる。しかし、法制上の江戸で、最も狭い範囲を示す、五街道の最初の宿駅までが江戸だという説でさえ当時の誰もが実感として諾^{うな}えなかったのではなかろうか。だから、法制上の江戸と、江戸庶民の意識の中にある江戸とは異なっていたし、同じ江戸庶民でも、時代により、その住んでいる所によって、江戸、特に下町に対する考えは一樣ではなかったであろう。江戸という語の示す範囲は右に述べたとおり曖昧だが、おおむね時代とともに広がり、

発展していったと見てよからう。

下町という語の示す範囲も曖昧で、甚だ厄介であるが、江戸という語の表す範囲と無関係ではないであらう。

本来、下町という語は、城下町しろしたまちの意で、千代田城の下に近接して展けた、町人を主とした町々の意である。言い換えれば、麴町、本郷、麻布、赤坂などの台地である山の手に対応する呼称であり、文字どおり低地の意の下町である。

「擬宝珠ぎぼしから擬宝珠まで」ということばがある。擬宝珠のある橋は千代田城の御門の橋を別にする、日本橋と京橋だけである。だから「擬宝珠から擬宝珠まで」は、日本橋から京橋までの通り、すなわち、日本橋から南へ、通一、二、三、四丁目と続き、中橋広小路を隔てて、南伝馬町みなあてんまち一、二、三丁目と続いて京橋に至る通りをさし、江戸の中で最も目抜きで、日本橋の本町とともに、まさに、下町の中の下町と考えてよい。『中央区史』によると、明治十一年（一八七八）に日本橋区・京橋区が成立する直前にはそれぞれ北江戶区・南江戶区と命名しようという腹案があったという。これによっても、現在のほぼ中央区に当たる地域が江戸の中の江戸、下町の中の下町という意識が長年にわたって実感として伝統的に伝わっていたことがわかる。

もう少し本格的な下町の範囲を広げると内神田を加えてもよからう。『御府内備考』卷之九「外

神田之一」の条には、「外神田は神田川内なる神田町々に対して私に称せる名なり。（中略）もとより下谷・鳥越に属する町にはあらず。また下町にも付しがたし」と記していて、外神田は、神田川の外側だから、内神田と違つて下町には入れられないといつてゐる。ましてその外にある下谷・浅草も下町とはいえないわけだ。前掲（八ページ）の池田説もこの辺に論拠があるのだろうか。

江戸という語の示す範囲は時の経過とともに次第に広がつてゆき、殊に明暦、天和等の大火を経て、復興と同時に拡張されてゆくが、それにつれて下用の範囲も拡大されていった。初め、外神田は、芝、下谷、浅草などと同様、下町の中に入らなかつた。例えば、芝であるが、

辰五郎 日本橋から比べりゃあ、芝の土地は場末だが、水道の水に変はりはねえ。（神明恵和合取組 浜松町辰五郎内の場合）

のように日本橋と比べれば、とても対等には考えられない場末ともいうべき所だったのである。外神田が内神田と同等の扱いを受け下町と見なされるようになったころ、芝もまた下町として扱われるようになった。

『諺語大辞典』に「江戸っ子の中の神田っ子」という項目があり、「神田の者は、最も江戸っ子気質なりという」と記している。また俗謡の「芝で生まれて神田で育ち、今じゃ火消しの纏持ち」などとするように、神田全体が下町の中心であると感じられるようになるのは江戸時代もかなり下つてからのことではなからうか。そのころになると、芝、下谷、浅草なども次第に下町の意識が持たれ

るようになったのであろう。

永井荷風の『すみだ川』（明治四十二年（一九〇九）に、長吉が、幼な馴染みのお糸に対して、「遠い下町に行つて芸者になつてしまふのが少しも悲しくないのかと長吉は言いたいことも胸一ぱいになって口には出ない。」と未練がましい思いを抱くくだりがあるが、浅草の今戸に住んでいる長吉が日本橋の葭町を「遠い下町」といつている。明治も末になって、まだこうした感覚が残つていたのであろうか。

深川、本所は論外で、元来は下総国で、明暦以後武蔵国に編入され、発展はしたが、常に江戸の郊外の感があり、朱引き内ではあるが、府内ではなかった。

例えば、『富岡八幡鐘』（享和二年（一八〇二）の刊）に、「どうぞそんなことを言はねえで、たった一度でもいいから、そけえ「そこへ」入れて寝かしておくれなせえ。後生だ。そのかはり、江戸へ出たついでに、虎屋の羊羹でも饅頭でも買って来て上げやす」とあるように、深川の者が大川の西岸へ行くのを、江戸へ行くといつてゐる。

本所や深川は、明治以後に東京市に編入されるようになってからもいわゆる川向こうで、下町とはいわれなかった。本所、深川が下町の意識をもつて扱われるようになったのはおおざっぱにいつてこの半世紀である。

「江戸っ子は宵越しの銭を使わない」という諺や「江戸っ子の生まれぞこない金を溜め」という川柳に表されているように、江戸っ子は金銭に淡泊で執着がないというのが通念で、一般には江戸っ子の潔さを讃美しているものと考えられている。また「江戸っ子は五月の鯉の吹流し口先ばかりはらわたはなし」という戯歌ざれうたに示されているように、江戸っ子はぼんぼんと威勢よく、思ったことを口にして正直だ、ないしは人の悪態もつぐが、恬淡としていて、他意がなく、腹の中はさっぱりしていると考えられていて、これも江戸っ子への讃美となっている。

しかし、考えようによれば、これらは江戸っ子に対する悪口と取れなくはない。金銭に執着がないということは、将来を慮おもんばかることのない、計画のなさを露呈しているし、威勢よく思ったことを言うが腹には何もないというのは、思慮がなく、無責任で、軽薄だということを暴露しているといえなくはない。だから前に挙げた諺などは、日本橋、京橋を中心とした大店おおだな、新川の酒問屋、日本橋の魚河岸などの旦那衆や蔵前の札差などといった本筋の下町の江戸っ子である人々に関して通用する文句では決してない。

こう考えてくると、江戸っ子には両義性がある。江戸っ子ということばで思い浮かべられてきた集団は、実は二つある。一般的な概念で思い浮かべられる江戸っ子は、「宵越しの銭は使わない」といった集団で、これに対して、本町、通町の大店の旦那衆などは概念の江戸っ子とはだいぶ違っ